
さんごく！

関安ざくろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さんじくー！

【Zコード】

Z1003P

【作者名】

関安ざくら

【あらすじ】

新聞部に情熱を注いでいるようだが、どうにも「コミュ力に欠ける、

劉備玄徳の魂を継いだ少年、林原流星。

流星の補助をしつつ、ツツコミが達者、関羽の魂を継いだ少女、紅井シホ。

ただのペット、張飛の魂を継いだ鳥、パタパタ。

二人と一匹が三国志とか一切関係なしに翻弄する学園ラブコメ。
え？ 転校生？ もう出でこないよ？

山奥にある、高校。

見た目は普通。一般的の公立高校よりかは少し建物が大きい、しかしどこにでもありそうな私立の高校。

そこに、三国志（え？ 三国志演義だつて？ 私よく判んないけどさ）の主人公的存在 刘備玄徳の魂を持った男子が居るという話を風の噂で聞いた。

まっさかー、そんなこと絶対ありえないってー、というかその人自分で劉備とか云つてんなら電波じやね？ つーかキモくね？ と友人と笑いながら喋つたはいいが、しかしその噂が本当だとかいう噂がまことしやかに流れていたりだとかして、しかも歴史家もその劉備の魂を（以下略）に会つたりだと何だとかしているではないか。

そんな中で、私が本物の劉備の云々よりも気になったのが、その劉備の（以下略）人物、どうやらかなりの変人らしい。小説のキャラから生まれたんだつたら当然かー、とか呑気に思いつつも、そつちの噂を聞いている限り、結構すごい人物だということが明らかになつて、さあ大変。しかも劉備（以下略）は結構なイケメンと聞くではないか。

ふむ。イケメン男子収集委員会（仮称）会長の私としては放つておくことなどできないではないか。

劉備の件はともかく、そのイケメンとやらがなんだか気になつて、よつしやそれじゃあそいつの姿を見てやるひつやないかい、と思つたので、その学校に押しかけることにした。

……ことが、そもそも間違いだった。

最初に云つておこう。

劉備（以下略）と関わつても、口クなことが起きないから、会つたりするのはやめなね。

絶対だよ、お姉ちゃんと約束。おく？

どうやら私は魔界に紛れ込んでしまったようだ。

今日から転校してきた白富リンです、趣味は80年代のテクノポップを聴くことです、よろしくねつと軽い自己紹介をした後の休み時間。普通ならよろしくー、だの、80年代のテクノポップとか古いなお前何歳だよ、とかそういううジッコミを待ちつつ自分の席でクールなフリして読書をしていたのだが。

なんと、誰も近づいてこない。
……だったら、いいんだけど。
逆なんですよ。

クラス全員近づいてきたんですよ、もひ。

「白富さんよろしく！」「テクノポップね、私も好きなの！ 白富さん、どのアーティストが好き？ 私はね、ちょっとマイナーだけどP-MODELが好きなんだあ！」「どうしてこんな中途半端な時期に転校してきたの？ 親御さんの転勤のせい？」「判らないことあつたら、何でも訊いてくださいね」「リンちゃんは部活入る予定はあるの？」「弟かお兄さんにレンくんって居ないの？」「スリー・サイズは？」「俺はTM NETWORKが好きなんだけどやっぱり小室さんは80年代が一番いいよね」

こんな風に私の描いていた”ちょっとちぢやほやされる”転校初日ではなく、”相当色々訊かれて疲れる”転校初日になってしまったのである。ちなみに、私は一人っ子で、鏡音でもないからその辺りしっかりわきまえていただきたい。

「ちょっと男子一、そんなにマシンガンみたいに聞いたら白富さん、

困ってるじゃない。もう少しゆっくり質問しなよー

おっと、私の助け船を出してくれた人が居るようだ。声のする後ろを振り返ると。

おお。思いつきり委員長面しとる、こいつ。

眼鏡で黒い髪。制服のブレザーは「丁寧に一番下のボタンを開けて、シャツは第一ボタンまで締めて、ネクタイはきつちり結ばれて、思いつきり正装スタイル。

ただし、手を持つものは、

「…………パソコン？」

「ああ、ごめんなさい。ちょっと、知り合いとの会話の時に、パソコンがないと大変だからずつと持ち歩いているの」

パソコンがないと会話しづらい人ってどんな人なんだろうと考えつつも、しかしデスクトップパソコンを抱きかかえてうろうろする人は珍しいんじゃないだろうか。普通そこはモバイルパソコンか、百歩譲つてノートパソコンだろ……。外国製（e M a c h i n e）のでつかい本体を大切そうに抱いて、それからモニターは左腕に抱えている。

「…………あの、パソコン、落とさないの？」

「これで六台目なの」

おお……それだけの出費ができるってことはブルジョアに違いない。

つて、だから、その委員長面の人との「ミニミニケーション」を楽しみたいのではなくて……この学校のなんだか異様な雰囲気について、訊きたいのである。

まつ、本人からして異様だから他の人をあたるとしようか。

「とりあえず、自己紹介しておくね。私は、放送部の神原力ナつていうの。このクラスの副委員長」

なんだつてー。副委員長がこんなにしっかりしている（？）んだつたら、委員長はそれこそなんだ、スーツでも着ているんじゃないのか。

……それはともかくだ。

何故、彼らはこんなに転校生に興味があるんだ。普通はちょっと遠巻きに見ていて、それからちらほら近づいてきて、ゆっくり質問が始まつて、後々質問が増えてきて裁ききれなくなつて、そこで委員長登場、な展開になるはずじやないか。

最初から委員長登場してたら、この後は質問タイムが廃れるに決まつていい。ということは、転校初日から最後は一人きりになると、いうパターンで……それは困る。

「こにはなんとか話を続けて、質問タイムがストップしないようにしなくては。

そう、転校生からすれば、質問タイムはクラッチタイムなのである。

と、読んだ本に書いてあつたんだけど、実際転校はこれが初めてなのでよー知らん。

「じゃあ、名簿番号順に質問をしていくってのははどう?」

委員長面した副委員長、カナが提案する。一回マウスが地面に落ちたが、近くに居た人がナイスキャッチした。どうこう連携プレーだよ。

「じゃあ、俺からだな」

といつて、名簿番号一番の秋山くんが私に質問をしつつ、そして答えつつ、一番の人が、三番の人が、と順々に流れ作業をしていると。

「なあ、そーいえばさ、林原ってどこ?」

「あつ、そういうば居ないねー。また特ダネでも見つけてきたんじやない?」

という会話が耳に入った。

なんだと。転校生の質問タイムに一人参加せずになにやらしている。なんだその不届き物。自分がクラスで浮くことが怖くないのだろうか。

「…ねえ、神原さん」

「カナでいいよ」

「カナ、その、林原くんって、誰？」

そこでクラスがいつたんシーンとなつてから、唐突に生徒たちがワーギャー騒ぎ出した。なんなんだこいつら。

「やつぱり！ レンちゃんも林原目当てで学校に来たんだ！」

「私も林原くんを人目見た瞬間、胸がきゅーんつてなつてさー！」

「じ…実は私もなの！ オープンキャンパスで林原くん見て、絶対

私この学校入るうと思つたんだ…！」

「じ…実は俺もなんだ…。男子トイレで林原を見て、絶対俺この学校入るうと思つたんだ…」

「さいごのやつはホモとみた。

……まあ、つまりは、男にも女にも人気の”林原くん”が居るらしいことはわかつた。

で、こんなに人気ということは即ち……

イケメン。絶世のイケメン。

つていうことにつながる。人間、所詮顔が總て。どれだけ性格がよくても顔がよろしくなければモテないのが世の中の仕組み。ふむ。では、そんなにイケメンということは、噂の劉備の意思を持つとかなんとかいう人は……林原くんってことかもしれない。なんだか簡単に物事が運びそうな勢いである。

「ねえ、林原くんて、このクラスなの？」

私は訊いてみると、クラスメイトの皆が満面の笑みで頷いた。おお、壯觀。

「そりなんだよ！ 林原くんは私たちのクラスの、委員長なの！」
ほう、カナ委員長候補から委員長の座を奪つたのは林原なのか。ふむふむ。ということは、なんだ、眞面目そうな副委員長とちょっとおちやらけた委員長つて感じか。軽い感じの男つて人気あるからな。

私なりに林原くんのイメージをまとめてみると。

「ミニユニケーーション力に長けていて、人気なイケメン。軽そうな

風貌とは裏腹に性格はよく、仕事も良くできる。部活にも熱心。クラスメートが転校生とじっくり話す機会を持たせるために、自分は他のところに出向いて、仲良くさせようとしていて、これが終わつた後は私と二人つきりで学校案内をしてくれる、と……。ぐへへへへ。

……おっと、私の欲望が表に出てしまった。

どうにかしてこの林原くんとやらと喋らなくてはいけない。劉備（以下略）の真相だつたりだと、イケメンの面を挙むだとか、それから……。

それから、何しよう？ 別に、私はイケメンを探して見るのは好きだけど、大してイケメンと付き合うだとかそういうことには興味はないんだよねー。

ま、学校生活送つてたら、いつかわかることか。よし、それでいいや。

そこでチャイムが鳴り、休み時間が終わつた。帰りに何人かの人と一緒に帰る約束をしつつ、私は席に戻つた。

「どうもいりつも、この学校は異様である。どれくらい異様かつていうと、グレープフルーツをみかんだと言い張つてゐるくらい異様。……だって、クラスメイト全員のコミュニケーション能力の高さ！　みんな人と喋ることに全然抵抗ないんだもんね！」

それに、皆すごい仲良しで、男子とか女子とかそんなん一切関係なくて、わいわい喋るし、だけど授業中は眞面目に受けてるし。ナニコレワラエルンデスケドー、と云う前に感動である。これぞ模範的なクラスというのだ。クラスの六分の五はDQNだった前までの高校と正反対過ぎて笑えます。素晴らしい学校ですね、ここは。

それもこれも、トップに立つ人が素晴らしいからなんじゃないだらうかと勘ぐり始めるが、もう止まらないのだった。

そうだ…トップ、つまり委員長が素敵過ぎる人だから、下々の者は皆彼を敬い、そして彼に習おうと必死なのであって……つまりは、彼ら以上にコミュニケーション能力に長ける人間で、そして眞面目で、しかし明るい性格で……ということは、なんだ、敬われるということは、とても信頼されているということで、人望もあつて……ヤバい。それでイケメンとか素敵過ぎる。素敵過ぎて素敵レベルが臨界点突破して大変なことになつてしまつ。早く林原くんとやらと喋らなくてはいけない。そして観察を続けて……前の学校の子たちに、うちの学校の奴すげーだろーはつはつはと自慢してやらなくてはいけない。

とにかく、この十分間の休み時間に、林原くんとやらが誰なのか、探すことにしてよう。

「ねえ、カナ」

まずは、一番話しかけやすい副委員長に訊いてみる。

「どうしたの？　レンちゃん」

カナはものすごい勢いでタイピングをしている。誰かと会話しているようである。

ちょっと迷惑だったかなー、と思いつつ、しかし一刻でも早く、委員長とやらの存在を知らないではいけない。私にはそういう使命があるのだ。

「あのわ……クラスのこととか、色々知りたいから、委員長に訊きたいんだけど……」

我ながらへタな言い訳ではあるが、言い訳しなくても大丈夫なくらい委員長は人気があるんだから、まあいいだろう。するとカナはにつっこりと笑って、私の隣を指指した。

「……え？」

「委員長、ここにいるよ」

「え？」

隣を見ても、誰も居な

……居た。なんか、やたら影の薄い人、居た。

いつの間にかカナからその影の薄い人にキーボードが変わつて、カナよりも早い速度でキーボードを入力している。

……へー。委員長つてこんな人なんだー。

「で、林原くんは？ その、イケメンな」

「だから、林原はこいつだつて。ね、林原、挨拶してあげて、転校生の白富リンさん。林原曰いてこの学校に来たんだつて。これで三十九人目だよねー」

「あの、私はこの影の薄い林原くんではなくて、『ミュニケーション能力に長けていて、真面目でしかし明るい性格で人望があつてイケメンな林原くんのことを云つているのですけれども」

「そんな出来すぎた人居る訳ないじゃん！ これがうちの委員長で、今大人気の林原流星。うちの委員長で、学年主席で、新聞部の部長だよ」

「そうですね、そんな出来すぎた人居るわけありませんね、はつはつは……」

つて、思いつきり詐欺じやんか！ どこが「コミュ力に長けてるんだよ！」この間、一度も私の方見てこないし… ずっとキーボード叩いてるし！ なんでこんな奴が人気なの？！

「あのー、林原くん」「

云い終わるや否や、彼は突然私の方を見、そして私の額をぱしつと一発叩いた。

なつ……！？

「ちょ……林原くん……？！」

殴られる覚えはないんだけど、と云おうとしたが、額になにやら違和感を感じた。

叩かれた場所に触れると、なにやら紙のような感触が。

「あー、林原はね、喋るのがすごく苦手だから、パソコンか、若しくはポストイットを人のどこかに貼り付けて、会話するの」

「へ」

思いつきり素つ頓狂な声が出てしまつたではないか。リン不覚。「とりあえず、何を訊いてそんなことを思つたかは知らないけど、林原は人と喋るのが凄く苦手…だから、「コミュ力なんて欠片もないし、むしろ「コミュ力をつけないとヤバいくらい」なの。私がパソコンをいつも持ち歩いているのは、林原と喋るため。ポストイットが切れてしまつたら、林原は増えるわかめの増える前みたいになっちゃうからね」

増えるわかめの増える前といつのは…干からびているといいたいのか？

というよりも、ポストイットで会話をする人つて結構斬新というか、「コミュ力とか以前にそんなに早く字が書けるのつて結構凄くね？」と思つてしまつた。

「でもね、よく見たら顔は結構いいんだよ。ほら林原、リンちゃんの方を向いてあげて……って、女の顔を見るのはいやとか言わないで、ほら早く。そんなこと云つたらホモ疑惑が立っちゃうわよもうおずおずといった様子で、林原は私の方を見た。

短めの黒髪。聰明そうな漆黒の瞳。緊張した口元。

まあ、悪くはない顔だった。男の顔に厳しい私でも、イケメン認定はしてやらないでもないぞ、というくらい。

ただ、認定することはするのだが、どうにも華やかさに欠ける。つづーか、林原を取り巻く空気がどこなく重いのが大問題である。

「…………あのー……」

私はその時になつて、林原が私の額に貼り付けたポストイットを見た。

『俺は林原流星。委員長だから、わからないことがあつたらいつでも質問してきていい。新聞部で忙しいが、そのときはカナに訊くといい。新聞部部員募集なう』

余りに当たり前のことだが書かれすぎで、どうにもコメントに困る文面であった。最後の新聞部部員募集なう、のところくらいか、つっこみどじろば。なうつてなんだ。

「林原くん……もうちょっと、ヒネリのある文章書けないわ~」

またも云い終わらない前に、彼は私の額にポストイットを貼り付けた。

『新聞部として、正しい日本語を使つことは重要なことだ。許してくれ』

『”なう”が正しい日本語つて云えんのかコワ』

『なうは既に日本人皆が知つていても過言ではない。企業なども盛んに利用している言葉だ。現代に生きる者として、新しい日本語は取り入れていくべきであらう』

『なうつて英語じゃん!』

『平仮名で書いているのだから日本語だ。そもそも、お前はなうの正しい使い方を知つてているのか? なうとは「～しているなう」などと、「～中」と書きたいときに使うもので、先ほどの場合の「新聞部部員募集中」と書きたいときは「募集中なう」と書くのは本当は間違いだ。中となうがかぶっているからな』

『そんな屁理屈聞くために君に話しかけたんじゃないんですけれど

も

『話していない。書いている』

「つるさいわ！」

『喋っていない』

「すじいわー、林原がこんなに喋るとこはじめて見たわー」

『「喋っていない！」』

ということで、初対面の印象はお互いなかなか最悪なものであった。

そして、クラスメートの口頭力の高さは、ある意味反面教師のようなものだと知つてから、私は反面教師の反面教師、おとなしくしてやろうと心に決めたのであった。

それからというもの（話によると前からだそうだが）、授業と授業の間の十分休憩の時間以外では、彼は教室に一切顔を出さなかつた。

新聞部に所属しているという林原。ただし、もう私には彼と関わる気は一切なくなってしまったので、新聞部にも興味がない。今も、そしてこれからも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1003p/>

さんごく！

2010年11月23日22時40分発行